

TOBUNKEN NEWS

2004
no.19



独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

デジタル画像体験

黒田清輝の目—風景・からだ・顔

美術部では、研究プロジェクトの一つとして、画家としてばかりでなく、教育者、美術行政家の面をも合わせもつ画家の実像を総合的に見直すための、「黒田清輝に関する再評価のための調査・研究」を進めています。また、情報調整室では、文化財研究を行うために不可欠な画像を、最新のデジタル技術を応用して形成することを目的に、「画像形成技術の開発に関する研究」を実施しています。これまでに両研究プロジェクトは、共同して黒田清輝作品の



光学的調査を行って参りました。このほどその成果を、多くの方々にご理解していただくために黒田記念館の二階の一室を会場に公開することにいたしました。

内容は、黒田清輝の『湖畔』、『智・感・情』、さらに肖像画を素材として、「風景・からだ・顔」という三つのテーマを立て、実作品と合わせて鑑賞していただき、同時に通常の人間の視覚では得ることができない、迫力ある高精細画像を体験していただけるように展示しました。たとえば、『湖畔』をもとにしたコーナーでは、手前に作品の反射近赤外線撮影による実寸大の画像を展示し、背後の壁面には、約25倍に拡大した高精細のフルカラー画像を一面に貼りました。当研究所の先端的な研究の成果の一端を紹介すると同時に、肉眼では見ることのできない画像を文字通り「体験」していただくことで、作品理解がより深まればと思います。2004年6



会場風景 撮影：城野誠治

月10日から11月7日まで、会期中、6,796人の来館者がありました。

(美術部・田中 淳)

平等院国宝木造阿弥陀如来坐像台座 及び光背への二酸化炭素殺虫処置

平等院本尊の阿弥陀堂（鳳凰堂）国宝木造阿弥陀如来坐像は、現在「平成大修理事業」中です（修理期間：平成16年1月中旬～平成17年8月末）。木造彫刻への文化財修理では、通常、修理に着手する以前に、臭化メチル製剤による燻蒸が行われてきました。しかし今年度殺虫処理を行う計画の国宝阿弥陀如来坐像の台座、二重円相（光背）と納入物の月輪^{がちりん}には進行中の食害は見あたらず、化学薬剤によるガス燻蒸を緊急に施工する状況にはなかったため、文化財への影響、修理作業者の健康、そして地球環境への配慮から、化学薬剤に頼らない殺虫処理法を実施できないか検討し、彩色の多い月輪^{がちりん}には低酸素濃度殺虫処理を、大きな台座や光背は二酸化炭素殺虫処理を行うことにしました。台座および光背の二酸化炭素殺虫処理は8月10日～24日に、月輪^{がちりん}の低酸素濃度殺虫処理は8月11日～9月10日に、いずれも平等院内に設けられた仮設の修理所内で行いました（作業委託先：中部資材株式会社）。処理期間中の安全対策として、二酸化炭素濃度測定器とパトライトを設置しました。また、炭酸ガス濃度測定や酸素濃度測定、温度・湿度の連続測定を行い処理が適正に進んでいることを確認しました。処理最終日、巨大なテントがしずしずとめくり上げられて台座・光背が眼前に再び現れた時は、関係者一同、感無量でした。効果については、テスト用の虫をしかけて確認しました。

修理期間中に修理所内の隣接区画で修理作業

を行いながら殺虫処理ができ、修理作業者の健康に影響が少ない点で、二酸化炭素処理・低酸素濃度殺虫処理は、文化財修理に適した方法と確信しました。これからは、修理事業でもスケジュールにうまく組み込んで施行して頂きたいと思います。



二酸化炭素殺虫処理後の点検の様子

(保存科学部・佐野千絵)

平等院鳳凰堂 仏後壁表面画の調査

十 円玉の図案で言わずと知れた京都宇治の平等院鳳凰堂ですが、その内部にある『仏後壁表面画』を実際にご覧になった方は少ないのではないのでしょうか。『仏後壁』とは「仏さんの後ろの壁」という意味ですが、鳳凰堂の場合、普段それは、ご本尊である阿弥陀如来坐



機材設営

像の背後に隠れてしまっており、ほとんど見ることができません。これに関する資料画像が全く無いわけではありませんが、実査が事実上難しいことなどから、画面全てにわたる本格的な撮影・調査は、これまで行われていませんでした。

現在平等院では、昭和初年代以来の大規模な修理事業が進行中で、それに伴い阿弥陀如来坐像は、境内に仮設された修理所に移されています。今回、情報調整室では、平等院からの依頼を受け、「画像形成技術の開発に関する研究」プロジェクトとして、『仏後壁表面画』の撮影・調査を行うことになりました。第一次撮影・調査は、酷暑の中7月下旬から8月上旬の2週間、連日朝8時過ぎから夜8時までの作業という強硬なスケジュールで行いました。撮影対象が、およそ3.5メートル四方にもなる大画面壁画であることから、カメラを取り付けた可動式スタンドは、総量30キロ、延ばせば総高3メートルという巨大なものを用い、その機材設営は、十分な安全性と操作性を確保するために、試行錯誤の繰り返しでした。

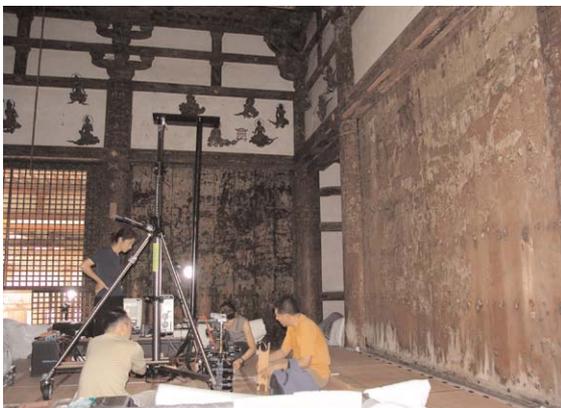
さて、画面は、そのかなりの部分が剥落して板の木目が露出しているような状態ですが、左下方には、山岳を背景にした宮殿内に坐す如来に王侯貴族が参詣・賛嘆する場面を、右上方には、浄土図と見られる情景を描き、その間を山

水でうめるといふかなり特殊な構図のものです。その描かれている主題については、明治時代以来さまざまな説が出されてきましたが、未だ決着を見ていません。近年、新説が立て続けに提出されていて、美術史研究者の間でも極めて注目されている作品と言えます。2005年1月と2月に行う予定の第二次、三次撮影・調査で作業終了予定ですが、この調査で得られた新たな知見が研究の進展につながれば幸いです。

(協力調整官一情報調整室・皿井 舞)

奈良国立博物館との 仏教絵画に関する共同研究

情報調整室では「画像形成技術の開発に関する研究」プロジェクトの一環として、平成16年度より奈良国立博物館と共同で仏教絵画に関する研究を行っています。その第一次調査として、8月16日から22日の1週間、平安仏画の白眉の一つである奈良国立博物館所蔵『十一面観音像』について、カラーデジタル撮影、蛍光撮影、反射、透過による近赤外線撮影を行いました。高精細のデジタル画像によって、作品の一部を拡大してディスプレイ上で観察してみると、目視では到底確認することのできなかった、顔料の粒子の形状や大きさ、色の



平等院鳳凰堂内（向かって右が仏後壁）



調査風景

塗り重ね方などが見え、作品の成り立ちの跡を手取るように追うことができます。また、これまで指摘されていた顔料とは別のものが使われていることが判明するなど、今回の調査を通じて多くの成果が得られました。

現在、仏教絵画に関する網羅的な基本資料集は極めて少なく、画像をはじめ様々なデータの蓄積とその公表は急務です。今後は、成果の公表のあり方についての協議も含めて、奈良国立博物館との共同研究を進めていく予定にしています。

(協力調整官—情報調整室・皿井 舞)

敦煌壁画の彩色材料・技法の調査

東京文化財研究所は、既に二十年近く、敦煌研究院と、壁画の保存修復について共同研究を行ってきましたが、近年は、壁画の撮影と画像の形成という手法によって、退色し、損傷した壁画の彩色材料や技法を解明する研究も行っています。敦煌莫高窟壁画の美術史的研究ではこれまで図像の解釈が中心でしたが、現地で壁画をつぶさに観察すると、後代に描き直されたり、補修を受けたものが少なくありませんので、当初の壁画と後代の補修部分等をはっきりと区別しなければ、正確に図像を解釈することはできません。また、壁画には退色、変色したものが多く、当初はどのような材料を使い、どのように彩色されていたのかについて、これまで強い関心が持たれてきました。そこで、現地で壁画の保存修復に関わってきた敦煌研究院保護研究所が顔料分析を行い、その成果を発表しつつありますが、壁画にはその他に種々の色料カラントが使用された可能性があります。当初の壁画がどれほどに色彩豊かなものであったかは、顔料分析に加えて、この色料の検出に

よってより明確にすることができます。さらに、退色等によって今日では肉眼ではっきりと見ることができなくなった銘記や輪郭線を視覚化することも歴史的研究にはきわめて有効です。これらの研究をするために、近赤外線撮影、高精度デジタル撮影、可視域蛍光撮影を行っています。これらはすべて非破壊による調査です。敦煌研究院もこれらの手法による調査に強い関心を示しています。情報調整室と美術部が参加する彩色技法研究班は、今年度は7月中旬に莫高窟を訪ね、53窟、205窟、275窟において様々な撮影を行いました。この敦煌での壁画調査の成果は、国内の古墳壁画や大谷探検隊将来の西域壁画の調査研究にも役立っています。

(美術部・中野照男)

太鼓踊の調査

西美濃の

岐阜県西部には民俗芸能の太鼓踊が多く伝承されています。太鼓踊とは大きな太鼓かっこや羯鼓を腹部に取り付け、派手な飾り物を背負って太鼓を叩き踊るもので、同種の芸能はほぼ全国に分布しています。東日本では一人立ちの獅子舞ししおどりや鹿踊などとして知られていますが、近畿地方を中心とした西日本では、中世・近世の歌謡を取り入れた風流踊と



岐阜県揖斐郡久瀬村三倉の太鼓踊

して多く伝承されています。

今回の調査対象である岐阜県西部の揖斐川流域の太鼓踊も豊かな歌謡を伴うもので、背にシナイ、ボンデン、ホロなどと呼ばれる神籬を背負い、村内の各所を練って歩きます。これまでに久瀬村・春日村・坂内村などで調査を行いました。分布が密集しているにもかかわらず、芸態や歌がそれぞれ異なります。とくに興味深いのは目的や由来の伝承で、いくつかの伝承地では「鎌倉踊」と称し、源氏の戦勝祈願の踊りに由来すると言っています。また多くの事例で奉納の目的は雨乞いであるとされています。太鼓踊を雨乞踊とするのは全国的に見られますが、西濃地域は降水量が比較的多く、山間部で水田稲作もあまり盛んでなかったため、その目的は少し不思議な感じがします。調査を通して、この地域の太鼓踊の多くが昭和前期を中心に伝承の途絶を経験しており、こうした由来・目的の語りや後の伝承復活の過程で形成されてきたらしいことがわかってきました。民俗芸能の伝承目的の変化を考えるための、たいへん興味深い事例であると言えます。

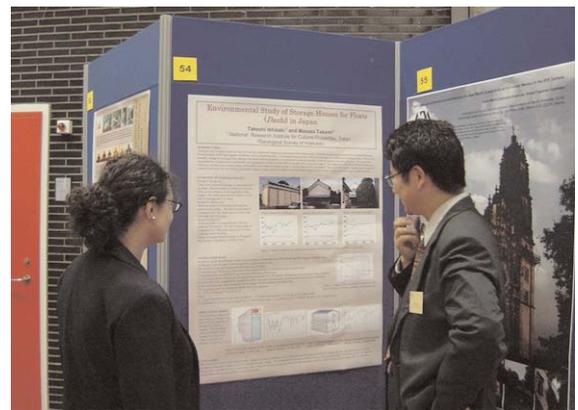
(芸能部・俵木 悟)

第21回建築環境に関する 国際会議参加報告

第21回建築環境に関する国際会議が、9月19日から22日までの日程で、オランダのアイントフォーフエン工科大学で開催されました。参加者は約300名で、220件の研究発表がありました。日本からも20名近くの研究者の参加がありました。この会議の一つのテーマとして、いかにエネルギーを使わずに建物内の環境を良くするか、ということがあります。これは、文化財施設内の温湿度環境を空調設備の

ない条件で良好な状態にするにはどうしたら良いか、ということを考えている我々文化財保存分野の研究者にとって大変参考になりました。東京文化財研究所からは、石崎が「日本の山車取蔵施設の保存環境に関する研究」というテーマで協力研究員の高見雅三氏と共同で研究発表を行い、建物内の温湿度の解析手法などについて有意義な討議ができました。

また、会議終了後はドレスデン工科大学（ドイツ）を訪問し、「文化財保護に関する日独学術交流」プロジェクトの一環として建築学科の研究者と建築材料内の水分移動に関するシミュレーションや水分特性の測定を行いました。



研究発表会場の様子

(保存科学部・石崎武志)

木造建造物の保存と活用に関する 国際シンポジウムの開催

9月29日と30日の2日間の日程で、山口県萩市において国際シンポジウム「歴史地区における木造住宅の保存、および地域の再生—萩市における町並み保存と活用に学ぶ」を開催しました。これは、現在国際文化財保存修復協力センターが推進しているパナマ共和国の「パナマ歴史地区の保存修復協力事業」の一環

として実施するもので、同事業としては3回目の国際シンポジウムになりますが、昨年度パナマ市において開催した第2回「世界遺産都市と歴史地区の保存と活性化—公的計画と民間のイニシアチブ、特に維持管理を中心にして—」に日本の事例報告として萩市役所の大槻洋二さんに参加して頂いたのがご縁で、今回は萩市での開催となったものです。

萩市は市内に3カ所の重要伝統的建造物群保存地区があり、行政と市民が一体となって熱心な町並み保存の活動を続けています。今年には1604年に毛利元就が開府して以来、ちょうど400年にあたる記念の年で、行事日程が目白押しの中、野村興児市長以下萩市役所の方々の全面的なご協力を得て、シンポジウムの開催が実現しました。日頃木造建造物の保存に係わる技術者、大学生、一般市民など2日間でのべ92人の方々が参加してくださり、パナマ3名、メキシコ、フィリピン各1名の専門家や日本の江面嗣人文化庁文化財調査官の報告を聞くとともに、熱心な質疑応答がなされました。また、各国参加者は萩市内を視察し、市民生活とともにある木造建造物保存の状況について、さまざまな視点から理解を深めました。



萩市内の重要伝統的建造物群保護地区の視察

(国際文化財保存修復協力センター・岡田 健)

「文化的景観」に関する研究会の開催

9月21日に第16回国際文化財保存修復研究会「“文化的景観”の意義—その保全、管理、今後の課題」を開催しました。これは、6月16日に閉会した第159回通常国会において、文化財保護法の改正が行われ、これまでの「文化財」の概

念に、新たに“文化的景観”が加えられることになったことをうけ、企画したものです。“文化的景観”は、もともと現行の文化財保護法概念では対処しきれない棚田など、自然景とも異なり、人びとの長年にわたる生活とともに形成された“景観”の保護をどうするかという課題があったこと、そして世界遺産の概念が変遷をとげる過程で、世界的にもこのような“景観”に注意が向けられるようになったこと、この二つが連動して文化財保護法への導入が進められたものです。

いっぽう、同じ国会で、国土交通省が提出した景観法も可決されましたが、これらの法律によって、何がどのように保護されようとしているのか、各法律間の関係はどのようになっているのかを確認するとともに、具体的な文化財保護の作業として、今後私たちに何ができるのかを研究しようという主旨で、各分野の専門家による報告と、出席者による熱心な質疑応答がなされました。

(国際文化財保存修復協力センター・岡田 健)

アフガニスタン文化財専門家
研修受け入れ(1)

国際文化財保存修復協力センターでは「西アジア諸国文化遺産保存修復協力事業」による人材育成の一環として、9月27日から12月24日にかけてアフガニスタンから考古

学の専門家を日本に招へいしています。

「東西文明の十字路」として知られているアフガニスタンには歴史のおよび美術的に価値の高い文化遺産が多く存在していますが、過去二十余年にわたる紛争や盗掘などによって、バミヤーンの大仏をはじめとする数多くの貴重な文化遺産が失われてしまいました。また、相次ぐ戦乱のため、現在、アフガニスタンでは学術的な考古学調査を担える人材も決定的に不足している状況です。このため早急にアフガン人専門家の人材育成を図り、アフガン人自身の手によって遺跡の調査および保存を行えるような体制を整える必要があります。そこで、技術的にも世界的な水準を誇る我が国で研修を行うことによってアフガン人考古学者の人材育成を図り、ひいてはアフガニスタンの文化遺産の復興とその保護に貢献することを目的に本事業を実施しています。

今回来日している考古学者はクシュカキー氏とファイズィー氏の2名です。両氏ともアフガニスタン情報文化省付属の考古学研究所に所属している研究員です。研修にあたっては奈良文化財研究所に全面的な協力を仰ぎ、平城宮跡における実地の発掘調査を通じて基本的な発掘技術、および写真や測量による遺構の記録の方法、さらに屋内において出土遺物の写真撮影や実測等、報告書作成のための基本的な技術と知識を



測量技術の研修風景

学んでいます。また、あわせて我が国の文化遺産についての知識を得ていただくことも大きな研修の目的の一つとなっています。

センターでは、アフガン人考古学者の研修に引き続き、平成16年度中に同じくアフガニスタンから文化財および歴史的建造物の保存修復専門家各1名、また、イラクから文化財保存修復専門家2名を日本に招へいし、研修事業を行っていく予定です。

(国際文化財保存修復協力センター・山内和也)

第9回国際研修 「紙の保存と修復」2004

平成16年度国際研修はICCROMとの共催で、紙の保存と修復をテーマに9月30日～10月1日の約3週間にわたって行われました。

今年度は、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポーランド、フランスなどヨーロッパからの参加者に混じって、モンゴル、インド、スリランカなどアジア諸国からの参加もあり、例年にも増して国際色豊かな研修となりました。研修の内容は、和紙や装こう材料に関する講義とワークショップを開催し、併せて絵画や書跡などの取り扱いを実施しました。講義は、装こう概論・繊維の同定・紙文化財の保存・和紙の大量強化処



裏打ちの説明

理などについて各分野から専門の講師を招いて行いました。また、ワークショップではさまざまな種類の和紙や膠・糊などの伝統的な修復材料を手にとってその特性を理解し、さらに虫損のある冊子に裏打ちを施すなど基本的な装こう技術を体得しました。それらの感想はエバリエーションペーパーにまとめました。

研修の第2週目には京都国立博物館文化財保存修理所において装こう師の行う伝統的な保存修理を見学しました。また、スタディツアーでは高知県を訪れ、伊野町立紙の博物館で手漉き和紙を製作し、さらに、高知県立紙産業技術センターほかで機械漉き和紙の製造工程並びに文化財修復に使用する多くの和紙を調査しました。

研修の最後に行われた参加者とのディスカッションでは、研修についての印象や感想などとともに国際研修への期待を話し合い、今回の研修を終了しました。ディスカッションの内容は、本年度の報告書に収録される予定です。

(修復技術部・加藤 寛)

博物館・美術館等の 保存担当学芸員研修

全国の博物館・美術館等に勤務する保存担当の職員を対象に、毎年保存科学部が中心となって行っている保存担当学芸員研修は、今回で21回目を数えます。参加者は31名で、北は岩手県から南は沖縄県までに渡り、7月6日～16日までの2週間実施されました。この研修は、文化財保存に必要な共通知識や技術の習得を目的としており、主に保存環境や材質調査、文化財修復などに関する講義と、温湿度測定機器の取り扱いや害虫同定などの実習からプログラムが構成されています。講義、実習ともに習得すべきことが多岐にわたり、しかも、

例年のない猛暑の中での研修でしたが、参加者はみな真剣に受講し、活発な質疑応答が行われ、時には講師が答えにたじろぐ程でした。特に害虫防除はどの館でも切実な問題であり、さらに2004年末、つまり今年限りで臭化メチルが全廃されることから、燻蒸の代替法である低酸素濃度処理などの実習や、総合的害虫防除法 (IPM) の講義には多くの時間を割きました。

今年度のケーススタディは、千葉県立大利根博物館で行いました。参加者が4人ずつのグループに分かれ、それぞれが設定したテーマに沿って、館内環境などに関する調査実習と、その結果発表を行いました。今回の研修で習得したことが各地で活かされ、また、今後も参加者の皆様と私たちが情報を交換しあい、さらに知識と経験を高めていくことを切に願っています。



実習中の様子

(保存科学部・吉田直人)

芸能部夏期学術講座開催

芸能部では毎夏、大学生・大学院生から受講者を募り、芸能部員が研究成果等を講義しています。本年度は7月12日～14日の3日間、「人形浄瑠璃の変遷」をテーマに芸能部の鎌倉恵子・飯島満と協力研究員の児玉竜一氏が担当しました。講義内容は以下の通りです。

- 第1日 近世の演出（鎌倉）
人形と首 1（鎌倉）
- 第2日 人形と首 2（鎌倉）
鬘 （鎌倉）
浄瑠璃から歌舞伎へ （児玉）
- 第3日 語りの変化と音声資料（飯島）
質疑

人形浄瑠璃について、これまで大学では文字資料を中心にした古典文学研究として扱われがちでした。この講座ではそれと異なって、江戸時代末期から現代に至る床本（台本）や演出の変化、明治以降の歌舞伎と人形浄瑠璃の関連、音声資料（レコード類）を研究に活用する際の留意点等を、芸能部の所蔵するSPレコード、床本も含めた視聴覚資料を使いながら具体的に示しました。また人形浄瑠璃文楽は、昨年ユネスコの「人類の口承及び無形遺産の傑作」に宣言されましたが、そのことに触れながら、現在の人形浄瑠璃が抱えている興行や伝承に関する問題点についても、取りあげました。

受講者は関東圏の学生を中心に33名。他に大学教員や日本芸術文化振興会（国立劇場）の職員も参加しました。学生の専攻分野は近世演劇だけではなく、地域社会環境学、地域原語文化、世界遺産等多岐に渡り、さまざまな分野を学ぶ学生たちの古典芸能への関心の高まりがう



「浄瑠璃本を使っでの講義」

かがえました。またアジア地域の留学生6名も受講しており、日本の芸能研究への熱意が伝わってきました。

参加者の多様性に応じて、最後の質疑ではさまざまな角度から質問がなされ、また普段は交流の少ない、専攻の違う受講者同士の意見の交換も行われました。

（芸能部・鎌倉恵子）

博物館学実習

平成16年度

今年度も学芸員を志す大学生を対象とした博物館学の実習が、8月30日から9月4日までの6日間、美術部で行われました。実習を受けた学生は、首都圏の大学から応募のあった11名。保存科学部・修復技術部・情報調整室のスタッフの協力も得て、博物館・美術館の現状を多角的に学んでもらいました。

掛軸や卷子などの作品の扱い方や、平成15年度よりはじめた展覧会案内状の整理作業にくわえ、今年は漆工修復のアトリエや黒田記念館での展示の現場を見学する機会を設けました。アトリエでは漆芸家の松本達弥氏より説明を受けましたが、みな熱心に聞き入り次から次へと質



実習風景一
巻子の取り扱い

問をするなど、強い関心を寄せていました。また実習期間中、東京国立博物館開催の「万国博覧会の美術」展に貸し出していた黒田清輝『智・感・情』の返却にともない展示替えを行い、実習生にはその様子を見学、さらに黒田清輝のデッサンを用いて作品の貸借の際に行うコンディションチェックを実際に体験してもらいました。ふだん整然と作品の並んだところしかお目にかかれぬ美術館の舞台裏をのぞくよい機会となったはずです。

そのほかにも課題として仮想の展覧会の企画案を作ってもらい最終日に発表、どれも自分の専門や関心を生かしたユニークな内容のものでした。短期間ではありましたが、例年にもまして盛りだくさんで密度の濃い1週間となり、実習生もひじょうに満足していたようです。

(美術部・塩谷 純)

『東京文化財研究所蔵書目録4』刊行

当所の蔵書を効率的に活用して頂くために、情報調整室では、蔵書データの整備を続けています。その一環として、『東京文化財研究所蔵書目録1__西洋美術関係』(2002年3月刊)、同『2__日本東洋近現代美術関係』(2003年3月刊)、同『3__日本東洋古美術関係 和文編』(2004年3月刊)に引き続き、2004年6月に『東京文化財研究所蔵書目録4__日本東洋古美術関係 欧文編』を刊行しました。

口絵では19世紀末から20世紀初頭に欧米のコレクターや研究者らにより刊行された日本美術の紹介本や、当研究所蔵書の核となった東京美術学校校長正木直彦(1862-1940)、美術史家中川忠順^{ただより}(1873-1928)、初代所長矢代幸雄(1890-1975)、所員尾高鮮之助(1901-1933)らの旧蔵本を紹介しています。日本美術紹介の

図書は当研究所美術部が1997年から着手した研究テーマ「日本における美術史学の成立と展開」に沿って収集されたものが多く、美術史学史の成立を考察する上で欠くことのできない貴重な資料群です。

また関係者の旧蔵本に書かれた献辞からは、当時の美術史関係者の海を越えた交流を見ることができます。本編では東京文化財研究所が所蔵する図書の中から、日本東洋の古美術に関する欧文図書1,257冊を収録していますが、既刊3冊と同様に単に蔵書目録というのみならず、蔵書形成の過程を通してみる美術史学の一資料でもあります。

現在は、同『5__和雑誌編』の刊行を目指して編集を続けています。なお、これらの蔵書データは、当所ホームページでご覧頂けます(<http://archives.tobunken.go.jp/index.html>)。



『東京文化財研究所蔵書目録4』

(協力調整官一情報調整室・中村節子)

新任のご挨拶

●保存科学部・犬塚将英●



平成16年6月1日付けで、東京大学大学院理学系研究科附属原子核科学研究センターより赴任してまいりました。これまでは素粒

子物理学の研究を行ってきました。物質を構成する最小単位の粒子とそれらの間に働く相互作用について調べるための実験的な研究です。物理実験を通してX線検出器の開発も行ってきましたが、このような経験を活かして、文化財の調査を目的とした新しい測定器の開発を進めることも今後の目標のひとつです。

東京文化財研究所で行われている研究内容については、その社会からの注目の大きさに日々驚かされています。着任早々、高松塚古墳に関する仕事などを通して非常に貴重な経験をさせてもらっております。しかし、これまでのような物理学一辺倒の研究生活から一変して、化学、生物のみならず、文化財、芸術、歴史なども勉強が必要であるので多少戸惑いも感じています。まだ右も左もわからない初心者でございますが、一日も早く一人前の保存科学研究者になれるよ

●修復技術部・加藤雅人●



平成16年9月1日付けで修復技術部に着任いたしました。元々は農学部で製紙に関する研究をしていた私

ですが、紙の分析という点から文化財に関わるようになりました。その後、文化財修理・修復に接する機会が増えるにつれ、文化財本紙はもちろん、修復材料・補助材料としての紙にも興味を持ちました。そして「紙とは、和紙とは、伝統とは？」という疑問が自分の中に生まれました。伝統的と言いつつこの100年で導入された新しい道具や手法、添加剤が和紙の分野にはあります。他の伝統分野ではどうでしょうか。伝統的材料を使用して伝統技術を用いて文化財の修理・修復を行うにあたり、「伝統」を再考する必要があると考え始めました。

そのような折に修復技術部伝統技術研究室に参りました。今後、伝統の検証という視点を保持しつつ、伝統技術に支えられている文化財の修理・修復に貢献できるように尽力したいと考えております。

人事異動

- 新規採用 平成16年9月1日付け 修復技術部伝統技術研究室研究員 加藤雅人

外国人来訪者

年月日	来訪者	所属	目的
16. 7. 6	李相弼近代文化財課長、禹景準建造物課行政事務官	大韓民国文化財庁文化遺産局	表敬訪問

年月日	来訪者	所属	目的
16. 8. 9	ハルーン・アミン在日アフガニスタン大使	在日アフガニスタン大使館	表敬訪問
16. 8. 25	ローラン・レヴィストロース有形文化財課長、 リークス・スミーツ無形文化財課長、文化庁2名、 通訳1名	ユネスコ本部	視察及び所長との懇談
16. 9. 2	アントニオ・アランテス所長	ブラジル国立歴史保存研究所	表敬訪問
16. 9. 15	林曼麗故宮博物院副院長兼財団法人国家文化芸術 基金会理事長、張世宗台北師範学院芸術教育学部 助教授、石瑞仁新竹師範学院美術工芸教育学部講 師、簡学義竹間聯合建築師事務所主宰者、彭俊亨 財団法人国家文化芸術基金会専門員、林舒財団法 人国家文化芸術基金会研究組研究員、藍恭旭財団 法人国家文化芸術基金会秘書	台湾博物館・美術館（故宮博 物院副院長、台北師範学院、新 竹師範学院、竹間聯合建築師 事務所、財団法人国家文化芸 術基金会）	施設見学
16. 9. 21	曹喜勝社会化学院歴史研究所室長、許宗浩社会化 学院歴史研究所研究士、玉井賢二文化財保護・芸 術研究助成財団専務理事	朝鮮民主主義人民共和国社会 化学院歴史研究所	施設見学及び意見交換

管理部・渡邊仁之

黒田記念館公開日カレンダー

●公開日：木曜・土曜 午後1時～4時 ●入館料：無料
12月26日～1月6日は、冬季休館となります。

January 1							February 2							March 3						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
						1			1	2	3	4	5			1	2	3	4	5
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	6	7	8	9	10	11	12
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26
23/ 30	24/ 31	25	26	27	28	29	27	28					27	28	29	30	31			

編集後記 協力調整官一情報調整室

●前号での紙面の刷新につづき、当編集部ではこのたび東文研ニュースの配付先の見直しをはかりました。これまでは当所黒田記念館と閲覧室でのみ一般配付しておりましたが、今後はより多くの方々にご覧いただけるよう、関連機関のご協力を仰ぐことにいたしました。広く、文化財に興味をお持ちの方々に読んでいただければ幸いです。(山梨絵美子)

●「タイポグラフィ・タイプフェイスのいま デジタル時代の印刷文字」というシンポジウムがありました（於：女子美術大学）。今では「コンピューター上での作業がイコール、デザイン作業になる」と考えられているが、すべてをモニター上で行ってしまふことが果たして

デザインと言えるのだろうか、といった趣旨の意見がありました。作業の効率化のためにも「デジタル」は必要ですが、従来の様々な過程も忘れてはならない、「アナログ」の重要性を考える機会となりました。(中村明子)

TOBUNKENNEWS no. 19
発行日：2004年12月31日
発行：独立行政法人文化財研究所
東京文化財研究所
印刷：よしみ工業株式会社
編集：協力調整官一情報調整室・中村明子